



巻 頭 言

水 を 活 か す

(財)日本植物調節剤研究協会 会長 櫛 淵 欽 也

水が稲作の安定生産をあげる上で、いかに大切な役割を果たしているか、この頃改めて考えさせられることが多い。水稻が連作障害のない唯一の作物であることが水田農業の強みの例にしばしば引用されるが、これなども水のお蔭だ。ちなみに、陸稲はそうはゆかないのである。

青森県の十和田地方は、昨年ひどい冷害に見舞われた。稲の穂孕期から出穂期にかけての低温の仕業である。多くの農家が半作に泣かされたという。そうした中で、知人の精農家K氏は、平年作を上げて注目をあびた。聞けば彼は真夏の低温の襲来に備えて、田植時に畔畦をしっかりと固め、漏水を完全に防ぐ対策をとり、低温期を通じて約20cmの深水を保ちつづけたという。溜められた水は昼の間太陽の副射熱で暖められる。夜間17℃（冷害発生の危険温度）以下に気温が下がっても水の温みによって幼穂が保護されるのである。これこそ冷害を防ぎうる唯一の武器だと彼はいう。ただし、多くの農家では手間のかかる漏水対策など、不断の備えがなく、彼のような完璧な深水管理は容易に実施しえないため、冷害年にはひどいめにあう。水の効用は判っていても、その恩恵に浴するためには、不断的努力が必要なのである。

さて、最近当協会で、精力的に取り組んでいる、ジャンボ剤の圃場試験を通じて、私は、水の効用なるものを、また一つ発見した思いである。ジャンボ剤（ゴルフボール大の除草剤の塊り）を広い水田に数個投げこんで、果して全面に除草効果があるのか、塊が落下した周辺の稲に薬害を起こさないか、こんな不安をもって、この試験を見守ったものである。ところが、繰り返し行われた多くの改良剤の試験結果から、このような心配のないことが判明した。それどころか、かなり強風のもとでも、水中拡

散によって、有効成分の水中濃度は1～2日後にはほぼ均一化するというデータを見せられて、水の効用に改めて感嘆すると同時に、やはりこのような水溶解性や拡散性のすぐれた、ジャンボ剤を、当協会の要請に応じていち早く作りあげてくれた、各メーカーの製剤屋さんの実力に敬意を表せざるを得ない。

昔から水田の水管理は稲作の安定生産上の基本とされて来た。そのため、田植が終ると毎日、農家は早朝自分の田を廻り、水の具合に細心の注意を払って稲を育てたものである。水を湛めるべきときには湛め、落すべきときには落す。これが雑草管理や、稲の健康管理の鉄則であるといわれ、多くの農家に実行されてきた。

ジャンボ剤のような「楽々散布法」のアイデアも、しっかりと湛水させることが出来て、はじめて生きた技術となる。水管理の基本をふまえてこそ、冷害防止と同様実効ある雑草管理が期待しうるのである。近年機械化の進展と共に、大半の稲作農家は兼業化している。昔のように、毎朝自分の田の「水廻り」をする農家は少なくなった。「稲のことは稲にきけ」という言葉があるが、稲と語れる人、いや語ろうとする人すら今では少なくなった。恐るべき勢いの近代化の波が2000年来培われて来た、稲と語る農の心を遠くへ押し流してしまったようだ。農の心を失った機械化稲作は、単なる澱粉生産工場でしかないようにすら思える。農業は工業と違って、自然を利用して生物を育てる産業であるから、工業の論理にはめすぎると、自然の手痛いシッペ返しをくらう恐れがある。どんなにハイテクを駆使する稲作時代になろうとも、水を活かし、太陽を活かすことが、稲作の基本であることを忘れてたくないものである。